(第1章)大阪公立大学蔵古典籍の資料性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2022-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田, 正宏 メールアドレス: 所属: 大阪府立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20220516-014

第１章

大阪公立大学蔵古典籍の資料性

西田 正宏

本稿は、オンラインイベント「上方・大阪都市文化の研究拠点形成―新収・吉沢コレクションを中心に―」で発表した原稿に若干の補訂を加えたものである。当日は初めてパワーポイントを使って発表した。発表の際のパワーポイントも資料としたので、合わせて参照していただきたい。また本発表は研究発表ではなく、基本的には大阪公立大学が所蔵する古典籍の紹介であり、本稿も論文とは言えないので、口語体のままとした。

１　はじめに

本日は、あまり耳慣れない題をつけましたが、大阪市立大学と大阪府立大学が統合して、新しく設立される「大阪公立大学」が特に古典籍について、どのような蔵書を有し、それが研究史的に見てどのような意義があるのかについてお話ししたいと存じます。「資料性」と名付けましたのは、恩師である伊藤正義先生がかつて使われたものを使わせていただきました。資料の性格とその価値というような意味をこのことばには込めています。

学会的にはすでに知られたことばかりで、目新しいことはあまりありませんが、まずは本日の研究発表の前座、全体の概論としてお話しさせていただこうと思います。

なお、「古典籍」と題を付けましたが、一部、近代の資料で重要なものについてもお話しさせていただくことになります。それでは、パワーポイントの発表資料をご覧ください（パワーポイントの画像は本章末尾に掲載）。冒頭に二つ〇を付けて掲げましたのは、まさに統合することによって物理的に倍になるわけで

すから、そのことと、府大、市大ともに「＊＊文庫」と呼ばれるものが多く集まっているということを、特徴して掲げておきました。

２　大阪府立大学（旧大阪女子大学）の古典籍

それではまず、現在、私の所属している大阪府立大学蔵の古典籍について取り上げます。このことも研究者のあいだでは知られたことかもしれませんが、大阪府立大学はそもそも工学・農学・経済学を中心とする実学の大学でありまして、いわゆる古典籍は皆無でした。いま大阪府立大学蔵書と申している古典籍はほとんど旧大阪女子大学所蔵のものです。それらについては、すでに整理されて、『和漢書目録』（一九七七（昭和五二）年）という目録が作られています。この目録が作られ、多くの研究者の知るところとなったと思われます。その蔵書の大部分は、「山田文庫」という蔵書印を持つものです。では山田文庫とは何かと申しますと、パワーポイントの資料にも説明しましたように、

山田文庫

大阪府女子専門学校（一九二四（大正十三）年設置）の創設資金提供者山田市郎兵衛氏ならびにその子孫の方がたからの、一九三四（昭和九）年から三次にわたる寄金によって購入された書籍を中心とする。後に一部、蔵書も寄贈。蔵書印は山田文庫。約二五〇〇点。江戸期の和本を中心とする。特別に珍しいものや特色のあるものを購入しようとしたというよりは、版本（江戸期に印刷された本）を中心に、幅広いジャンルが集められており、啓蒙的な書物（江戸期の古典注釈書）も多く、研究というよりは教育に中心を置く集書であったと思われる。とはいうものの、

・室町期書写の『自讃歌注』、『（伝兼好筆本）伊勢物語』

・飛鳥井雅章の歌集（歌数の最も多いもの）→古典文庫

・『物臭太郎絵巻』『道成寺絵巻』などの室町後期から江戸初期にかけての絵巻物

・『はちかづき』『ゑぼしおり』『岩屋草子』などの奈良絵本

・『源氏物語』の絵の描き方を指示した『源氏物語絵詞』

など、研究の面からも貴重なものを含む。江戸期の和本の中にも稀少なものがあるが、一点一点の書誌的調査は今後の課題である。

ということになります。大阪府立大学、旧大阪女子大学の古典籍は、この山田文庫が大部分を占めています。パワーポイントには、代表的なものとして、『物臭太郎絵巻』と『源氏物語絵詞』を資料として載せておきました。

『物臭太郎絵巻』については、一九七六（昭和五一）年、信多純一氏編著『古本物くさ太郎』に写真版と翻刻に加え詳細な諸本解題が付されて、提供されています。資料のもつ文学史的な意義も信多先生の御本に詳しく述べられています。ちなみに中学校の歴史の教科書などにもよく利用されています。

『源氏物語絵詞』についても、玉上琢弥氏に他の伝本のことなどを含め、詳細な研究が備わっています。「絵詞」ですが、ご覧のように源氏物語の絵が描かれているわけではなく、どのように絵画化するかを指示したものです。

『和漢書目録』には、それ以外にも、

瀧村記念文庫

大阪府女子専門学校初代校長滝村斐男の寄贈書（大正十四年）。その多くは父瀧村小太郎の蔵書であったとみられる。蔵書印は瀧村記念文庫。楽譜などの音楽資料の他、不如学斎叢書一六七冊（岡田景徽編、勝海舟序（自筆））、海舟伝稿二六冊（瀧村小太郎編）、『飛鳥井家秘抄』などを含む。和本のみが貴重書庫に収められる。

や、小澤記念文庫（小澤融覚）、平林文庫（平林治徳）、石山記念文庫（石山徹郎）などが収録されています。例えば、小澤記念文庫の和書は江戸時代の料理書がほとんどです。これら『和漢書目録』に収録されているもの以外に、「山崎文庫」があります。山﨑文庫については次に示した通りです。

山崎文庫

大阪女子大学教授であった山崎喜好氏（昭和三二年没、四九歳）の収集された俳書を中心に、関係書（山田文庫所収の俳書など）を増補して構成。約一二〇〇点。

蔵書印は山崎文庫。そもそもは俳書以外も存在したと思われ、それらは山崎文庫とは別置される。蔵書印によってその存在は確認できる。「漢和聯

句懐紙」（慶長十三（一六〇三）年～寛永十三（一六三六）年にかけての宮廷聯句の懐紙）、北村季吟自筆「延宝六年歳旦巻物」（一六七八）、『本朝文選』初版（一七〇六）、「名家消息」（俳人書簡を張り継ぎ、四巻としたもの）など稀覯書を含む。

また大きな特色は、山崎氏が調査の過程でペン筆写された多くの俳諧関係のペン写原稿類や影写したものが多く残されていることである。そのなかには現在散逸して失われたものも多い。

山崎文庫については、『山崎文庫目録』（一九七二（昭和四七）年）が作られています。パワーポイントの資料としては、山崎氏の手になるペン写本を挙げておきました。これらは、すでに原本の所蔵者がわからなくなってしまったものや焼失した資料もあり、この山崎氏によるペン写本の価値は今後もっと見直されるべきだと思います。またこのペン写本には、山崎氏による資料の貸し借りなどの書き入れも多くありまして、当時の俳文学研究者との交流をうかがわせる重要な資料です。

比較的最近、寄贈されたのが、大阪女子大学名誉教授で、近世演劇の研究者の土田衞先生の蔵書である「椿亭文庫」です。

椿亭文庫

二〇〇三（平成十五）年、大阪女子大学名誉教授土田衞氏より長年の収集にかかる歌舞伎・浄瑠璃など演劇関係書の寄贈を受けたもの。演劇関連の書籍以外に当時の時代状況を伺うための資料（暦）や当時の辞書なども含む。特に『あやね竹』は大森善清という上方の浮世絵師の一級資料であり、学会での評価も高い。

蔵書印は　椿亭文庫　椿亭蔵書　土田衞　土田文庫　など。

『椿亭文庫目録』（二〇〇五（平成十七）年、上方文化研究センター研究年報第六号別冊）および『椿亭文庫所蔵歌舞伎番付目録』（二〇〇九（平成二一）年、上方文化研究センター研究年報第十一号別冊）が刊行されている。

椿亭文庫は演劇関係の書籍が多いのですが、今回資料として挙げましたのは『あやね竹』という絵本です。中国古典を題材に描かれたものですが、この作

者は、上方の大森善清という浮世絵師で、当時の版本にも挿絵を描いています。現在大和文華館の館長をされている浮世絵の研究者・浅野秀剛氏による研究が具わっていますが、この大阪府立大学本、土田先生の御本は、初版の完本としては唯一のものであるようです。また大森善清の基準作としても価値の高いものです。

他にまとまったコレクションとしては、児山文庫があります。次にまとめましたように、大阪女子大教授であった児山信一氏の蔵書で、近代の歌集を中心とするものです。

児山文庫

大阪女子大学教授児山信一氏旧蔵の明治大正期の歌集を中心とするもので六五四冊から成る。児山氏には『新講和歌史』という著作があり、その執筆に関連して、収集された書籍かと推量される。児山は一九三一（昭和六）年に三十二歳の若さで死去。

さらに、比較的大阪府が財政的に裕福であった時代に、例えば、理系が大規模な実験機材を購入するための設備費が、措置されていたことがありまして、それが国文学科に廻ってきた折に購入したのが次の資料です。

上方古典芸能資料

『芝居番付・絵尽目録』（一九八一（昭和五六）年）

上方古典芸能資料収集の特別予算が認められ、昭和五五年三月に購入されたもの。歌舞伎の番付六八六枚と絵尽三九七点をとじ合わせた十九冊と浄瑠璃の番付一冊（五八枚）、そして明治初期の劇場座席売上表二三冊からなる。演劇の文化史的な環境を知るのに欠かせない資料。

『浄瑠璃本目録』（一九八九（平成元）年）

これも上記と同様の上方古典芸能資料収集の一環。一五〇点。近松や竹田出雲をはじめとする浄瑠璃正本のコレクション。

今回は、先に挙げた近世演劇のものではなく、同じ経費で購入した『謡絵本　松風』を挙げておきました。この資料についてもすでに小林健二氏による詳細な解題が具わります（伊藤正義先生編『磯馴帖』）。詞章は謡曲の松風をそのまま

写したものですが、描かれている絵に、当時の舞台の状況（特に作り物の様子）が反映されていると言われています。能を絵本化したものはあまりなく、そういう面からも貴重な資料です。

以上、ここまでは、大阪府立大学の蔵書を紹介して参りました。大阪女子大学からのものをそのまま継承しているわけです。

３　大阪市立大学蔵の古典籍

次に大阪市立大学の蔵書を見ていくことにします。まず国文学の研究者に最もよく知られているのが、「森文庫」だと思われます。次に森文庫と所蔵者であった森繁夫氏について簡単にまとめておきました。

森文庫

森繁夫氏の蒐集した書籍。上方を中心とする人物、和歌資料。おおむね大阪市立大学が所蔵するが、雑誌など一部は、関西大学などにも。

森繁夫

明治十五年岡山県生まれ、素封家森十郎男。号は、「小竹園（ささぞの）」。昭和二十五年西宮市甲陽園にて没。早稲田専門学校（現早稲田大学）卒。摂陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就く。

短冊の蒐集は斯界の第一人者として、また、国学者歌人の筆蹟伝記の研究者として名高い。歌は佐々木信綱の門人として「心の花」に属した。

「先賢伝記資料」と名付けた人物伝のカード記入は、大正の末頃から始められたと思われる。昭和四年六千枚、同五年六千枚等欄外に印刷され、膨大かつ貴重なものであるが、後年中野荘次氏の目にとまり、「名家伝記資料集成」と題して出版された。

蒐集された書籍類は、一括して大阪市立大学に寄贈、「森文庫」としてしられ、その全容は「大阪市立大学図書館所蔵森文庫目録　上・下」としてまとめられている。

今回は、手元に適当な写真がありませんでしたので、以下は、図版はありませ

ん。現在、大阪府立大学で作成していた『蔵品選』から一部を抜き出し、それに主として森文庫の和歌資料を加えて、新大学の特徴的な資料を紹介する冊子を、開学に合わせて作成しています。先日、森文庫の撮影も終えました。

それはそれとしまして、大阪市立大学には、そのほかにも著名な文庫が多く知られています。広辞苑の編纂などで著名な元京都大学教授・新村出博士の蔵書の一部が入っています。「新村文庫」です。これは目録もあります。また市大の国文学専攻に関係するところで言えば、万葉集研究の第一人者で、大阪市立大学名誉教授・小島憲之博士 の全蔵書も収められています。

古典籍というわけではありませんが、大阪市立大学の奥野久美子准教授が研究を進められています、芥川龍之介と親交があった、大阪市立大学初代学長・恒藤恭の関連資料もあります。

他にも、福田文庫（元東京商科大学教授・福田徳三博士の全蔵書）、ゾンバルト文庫（ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルト博士の蔵書の一部。経済学、特に社会主義関係の文献多数）、内藤文庫（元京都大学教授・内藤湖南博士の蔵書の一部。中国古代史、史学、仏教に関する漢籍など）など、古典籍だけには限らない多くの蔵書が、現大阪市立大学には存在しています。

そして今回、ここに新たに、「吉沢コレクション＝吉沢英明氏所蔵の講談本を中心とする近代から現代にかけての大衆演劇資料」が加わったと言うことになります。明治・大正期の講談本が中心ですが、江戸時代の実録の写本も存在します。このあとにこの吉沢コレクションについて、奥野さんと大阪大谷大学教授・高橋圭一氏に発表していただくことになります。

４　大阪市立大学蔵の古典籍上方学芸（文学と芸能）

それでは最後にこれらの蔵書をどのように活用、活用というのはあまりよい言い方ではないのですが、敢えてそのように申しあげますが、私見を申し上げたいと存じます。ご承知のように大阪女子大学の資料も研究者の間では著名なものでした。大阪市立大学のものももちろんそうです。国文学の学会ではよく知られたものです。原典を所蔵していることがいかに研究するうえで、強みで

あり、重要なことであるのかということも主張してゆく必要があると思います。「知る人ぞ知る」資料ではなく、広く一般の人にもその価値を知ってもらうことも大切なことです。大阪女子大学と大阪府立大学が統合したときから、現在まで貴重書の公開講座を、細々とではありますが続けてきました。古典籍を所蔵することの意義について、少しは理解していただけるようになったのではないかと思っています。

そこで、今回、文学部が森之宮に移転するとき（二〇二五年予定）に、これらの資料のうち、特に大阪を中心とするものを集め、「大阪（上方）学芸資料」として、大阪府立中之島図書館の大阪誌料に匹敵するものとして打ち出すことができるのではないかと考えています。以下にその特徴について述べたいと思います。

①　文献と演者と

大阪公立大学の所蔵する上方学芸資料は、研究者は言うまでもなく、「現代の演者と密接に関係している」ということを特徴としてあげることができるでしょう。

先に挙げました土田先生の「椿亭文庫」および大阪女子大学時代にまとめて購入した「上方芸能資料」の浄瑠璃や歌舞伎の資料は、久堀教授（文学部）が研究対象としておられますし、文楽協会のさまざまな技芸員、例えば、桐竹勘十郎（三代目）さんを招いて「講座」を開催しています。

また観世流が中心ですが、版本の謡本や先にも挙げた「謡絵本」等の資料は、いまは能の研究者は大阪公立大学にはいませんが、喜多流を創設した北（後に「喜多」）七太夫は堺の出身（『堺鑑』による）で、秀吉に認められました。実は、私はいま、喜多流の能楽師の友枝雄人師に　謡と仕舞のお稽古をしていただいておりまして、公演のパンフレットに解説を書かせてもらったりしています。

そしてまさにここに吉沢コレクションという膨大な講談関係の資料が加わることになったわけです。ご承知のように奥野准教授（文学部）が研究を進められておりますし、まさにその御縁があって、このコレクションは大阪市立大

学に入ったわけです。そして、今回もご登壇いただきます旭堂南海師は大阪府立大学での公開講座などを中心に交流をさせていただいています。資料と研究者と演者がつながることになったわけです。

今さららしく申しあげるまでもなく、多くの蔵書は研究と一体になって、初めてその価値が確認されることになります。さらにそこに演者が加わることで、古典研究、文献研究だけにはとどまらず（古典の世界だけには閉じず）現代にも開かれた視点を持つことができると思われます。

なお、研究ということだけで言えば、上方学芸に関係するものとして「伏見屋文書」があります。歌舞伎役者と遊女の関係などを具体に示すものですが、こちらは佐賀教授（文学部）が研究対象とされる可能性がありますし、「森文庫」については、私が研究対象にし、実際に森文庫の資料を使って、論文も書かせてもらっています。

②　「学」としての芸能研究の伝統の継承

さらにこれらの研究が、「市大国文」の伝統である、文献に基礎を置く地に足のついた研究（文献基礎学）を継承するものであることも重要な意味を持っているでしょう。

浄瑠璃・歌舞伎については、大阪市立大学には、近松の研究者で、演劇を興業（文学的な環境）なども含めた総体として捉えることや、「文学史」という視点の重要性を説いた森修先生、さらにその研究を継承、発展させた阪口弘之先生がおられ、そして大阪女子大学には先程来申しあげてきました「椿亭文庫」の所蔵者であった土田衛氏がおられます。また能については、文学史的環境という視点から能や謡曲の詞章を考察された大阪市立大学の伊藤正義先生、そして同じ京都大学出身と言うことで、伊藤先生に私淑されていた堀口康生氏（大阪女子大）がいます。このような芸能研究の伝統に、先ほどから何度も申しあげていますように「講談」の研究が加わることになったのです。

新大学では「総合知」ということが喧伝されています。しかし「総合知」なるものがそうそう簡単に身につくものではないことは今さら申しあげるまでもないことです。それを真に下支えする（文献）基礎学（＝古典知とよんでも

よいかもしれません）の重要性を再認識させるためにも、これらの蔵書を、改めて学内、学外に知らせる必要があると考えています。

一方で、この吉沢コレクションの全貌を明らかにするためには、講談本の内容を分析する国文学（古典および近代文学）は言うまでもなく、歴史学、思想、美術、大衆芸能などの研究、またコレクション自体の整理には、図書館学や出版情報学などありとあらゆる人文系学問の専門知を結集させて取り組むことが必要です。そういう意味ではこの吉沢コレクションは、人文系学問の「総合知」を実践する題材であるとも言えます。

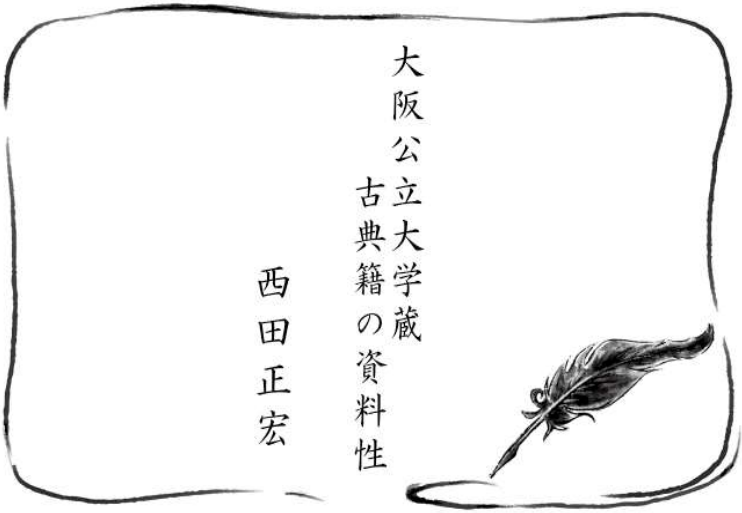
最後に原典（原本）を所蔵することの強み、意義を象徴的に証明するものとして、現大阪府立大学所蔵の漱石の自筆原稿を挙げておきました。

活字本からでは得ることのできないさまざまな情報が、この原稿からは読み取れます。漱石がふつうに草仮名を使っていることも、あたり前のこととはいえ、真っ先に気づくところです。授業でもこの原稿をプリントにして配布したりしていますが、まずそのことに学生たちは、驚くようです。今までにない視点から、考え始めるようです。

以上、最後は蛇足の蛇足みたいなことになりましたが、これで大阪公立大学が所蔵する資料についての概論的な話を終わらせていただきます。

大阪公立大学蔵古典籍の資料性

西田正宏



○西大学が統合することにより西日本において、質・量ともに古典籍を蔵する有数の大学となる。

○さまざまな特色ある「文庫」が集まる。

一、大阪府立大学蔵の古典籍

旧大阪女子大学所蔵のものが中心

→『和漢書目録』・『蔵品選』

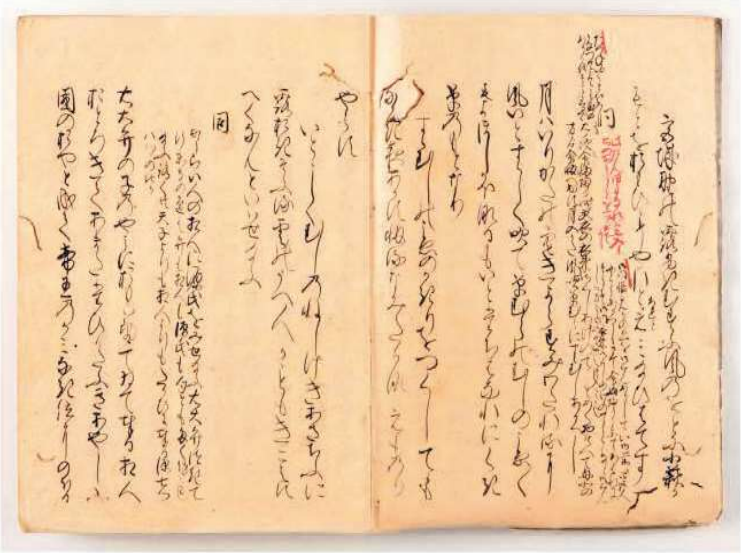
山田文庫

大阪府女子専門学校（一九二四（大正十三）年設置の創設資金提供者山田市郎兵衛氏ならびにその子孫の方がたからの、一九三四（昭和九）年から三次にわたる寄金によって購入された書籍を中心とする。後に一部、蔵書も寄贈。蔵書印は山田文庫。約二五〇〇点。江戸期の和本を中心とする。特別に珍しいものや特色のあるものを購入しようとしたというよりは、版本（江戸期に印刷された本）を中心に、幅広いジャンルが集められており、啓蒙的な書物（江戸期の古典注釈書）も多く、研究というよりは教育に中心を置く集書であったと思われる。とはいうものの、

・室町期書写の『自讃歌注』『〈伝兼好筆本〉伊勢物語』
・飛鳥井雅章の歌集（歌数の最も多いもの）→古典文庫
・『物草太郎絵巻』『道成寺絵巻』などの室町後期から江戸初期にかけての絵巻物
・『はちかづき』『ゑぼしおり』『岩屋草紙』などの奈良絵本
・『源氏物語』の絵の描き方を指示した『源氏物語絵師』

など、研究面からも貴重なものを含む。江戸期の和本の中にも稀少なものがあるが、一点一点の書誌的調査は今後の課題である。

『物臭太郎絵巻』



『源氏物語絵詞』

瀧村記念文庫

大阪府女子専門学校初代校長滝村斐男の寄贈書（大正十四年）。その多くは父瀧村小太郎の蔵書であったとみられる。蔵書印は瀧村記念文庫。楽譜などの音楽資料の他、不如学斎叢書一六七冊（岡田景徴編、勝海舟序（自筆））、海舟伝稿二六冊（瀧村小太郎編）、『飛鳥井家秘抄』などを含む。和本のみが貴重書庫に収められる。

瀧村文庫音楽関係資料

他に、小澤記念文庫（小澤融覚）、平林文庫（平林治徳）石山記念文庫（石山徹郎）などが、『和漢書目録』に収録されている。

山崎文庫

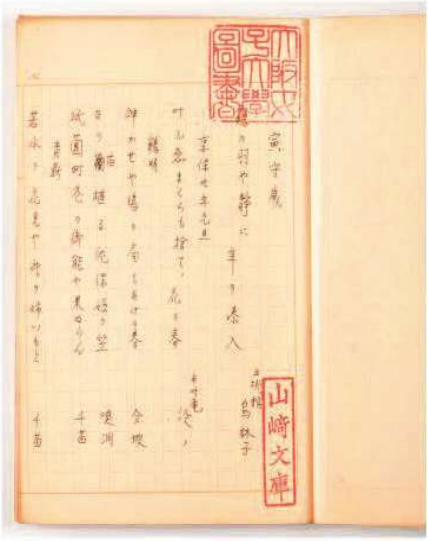
大阪女子大学教授であった山崎喜好氏（昭和三二年没、四九歳）の収集された俳書を中心に、関係書（山田文庫所収の俳書など）を増補して構成。約一二〇〇点。

蔵書印は山崎文庫。そもそもは俳書以外も存在したと思われ、それらは山崎文庫とは別置される。

蔵書印によってその存在を確認できる。「漢和聯句懐紙」（慶長十三（一六〇三）年～寛永十三（一六三六）年にかけての宮廷聯句の懐紙）、北村季吟自筆「延宝六年歳旦巻物」（一六七八）、『本朝文選』初版（一七〇六）、「名家消息」（俳人書簡を張り継ぎ、四巻としたもの）など稀覯書を含む。

また大きな特色は、山崎氏が調査の過程でペン筆写された多くの俳諧関係のペン写原稿類や影写したものが多く残されていることである。そのなかには現在散逸して失われたものも多い。

→『山崎文庫目録』（昭和四七年・一九七二）



山崎文庫ペン写本

椿亭文庫

二〇〇三（平成十五年）、大阪女子大学名誉教授土田衛氏より長年の収集にかかる歌舞伎・浄瑠璃など演劇関係書の寄贈を受けたもの。演劇関連の書籍以外に当時の時代状況を伺うための資料や当時の辞書なども含む。

特に『あやね竹』は大森善清という上方の浮世絵師の一級資料であり、学会での評価も高い。

蔵書印は　椿亭文庫　椿亭蔵書　土田衛　土田文庫など。

『椿亭文庫目録』（平成十七年三月、上方文化研究センター研究年報第六号別冊）および『椿亭文庫所蔵歌舞伎番付目録』（平成二十一年十二月、上方文化研究センター研究年報第十一号別冊）が刊行されている。

あやね竹

児山文庫

大阪女子大学教授児山信一氏旧蔵の明治大正期の歌集を中心とするもので六五四冊から成る。児山氏には『新講和歌史』という著作があり、その執筆に関連して、収集された書籍かと推量される。児山は一九三一（昭和六）年に三十二歳の若さで死去。

◎上方古典芸能資料

『芝居番付・絵尽目録』（一九八一年）

上方古典芸能資料収集の特別予算が認められ、昭和五五年三月に購入されたもの。歌舞伎の番付六八六枚と絵尽三九七点をとじ合わせた十九冊と浄瑠璃の番付一冊（五八枚）、そして明治初期の劇場座席売上表二三冊からなる。演劇の文化史的な環境を知るのに欠かせない資料。

『浄瑠璃本目録』（一九八九年）

これも上記と同様の上方古典芸能資料収集の一環。一五〇点。近松や竹田出雲をはじめとする浄瑠璃正本のコレクション。

『謡絵本　松風』

二、大阪市立大学蔵の古典籍

森文庫

森繁夫氏の蒐集した書籍。上方を中心とする人物、和歌資料。おおむね大阪市立大学が所蔵するが、雑誌など一部は、関西大学などにも。

森繁夫

明治十五年岡山県生まれ、素封家森十郎男。号は、「小竹園（ささぞの）」。昭和二十五年西宮市甲陽園にて没。早稲田専門学校（現早稲田大学）卒。摂陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就く。

短冊の蒐集は斯界の第一人者として、また、国学者歌人の筆蹟伝記の研究者として名高い。歌は佐々木信綱の門人として「心の花」に属した。

「先賢伝記資料」と名付けた人物伝のカード記入は、大正の末頃から始められたと思われる。昭和四年六千枚、同五年六千枚等欄外に印刷され、膨大かつ貴重なものであるが、後年中野荘次氏の目にとまり、「名家伝記資料集成」と題して出版された。

蒐集された書籍類は、一括して大阪市立大学に寄贈、「森文庫」としてしられ、その全容は「大阪市立大学図書館所蔵森文庫目録　上・下」としてまとめられている。

新村文庫

広辞苑の編纂などで著名な元京都大学教授・新村出博士の蔵書の一部。

小島文庫

万葉集研究の第一人者で、大阪市立大学名誉教授・小島憲之博士　の全蔵書。

恒藤記念室寄託資料　および　**恒藤文庫**

大阪市立大学初代学長・恒藤恭の関連資料、芥川龍之介と親交があった。

吉沢コレクション

吉沢英明氏所蔵の講談本を中心とする近代から現代にかけての大衆演劇資料。二〇二一年に新しく加わった。

他に、**福田文庫**（元東京商科大学教授・福田徳三博士の全蔵書）、**ゾンバルト文庫**（ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルト博士の蔵書の一部。経済学、特に社会主義関係の文献多数）**内藤文庫**（元京都大学教授・内藤湖南博士の蔵書の一部。中国古代史、史学、仏教に関する漢籍など）など。

三、上方学芸資料としての展開　※学芸＝文学と芸能

森之宮キャンパス（二〇二五年開学予定）を中心に大阪（上方）学芸資料として大阪府立中之島図書館の大阪誌料に匹敵するものとして打ち出すことができるのではないか。

①文献と演者と

上方学芸資料は現代の演者と密接に関係している。

椿亭文庫　および　**上方芸能資料**

浄瑠璃・歌舞伎資料→久堀教授（文学部）
桐竹勘十郎（三代目）→　上方講座

森文庫

上方人物・和歌資料　→　西田

伏見屋文書

歌舞伎役者と遊女の関係など　佐賀教授（文学部）

謡本

喜多流を創設する北（後に「喜多」）七太夫は堺の出身で、秀吉に認められる。→（能）（喜多流）友枝雄人師

吉沢コレクション

講談資料→文学部・奥野准教授（文学部）・西田
旭堂南海　→　公開講座など
桂春団治（四代目）→落語講座

多くの蔵書は研究と一体になって、初めてその価値が確認される。さらにそこに演者が加わることで、古典研究、文献研究だけにはとどまらず（古典の世界だけには閉じず）現代にも開かれた視点を持つことができる。

②「学」としての芸能研究の伝統の継承

文献に基礎を置く地に足のついた研究（文献基礎学）が「市大国文」の伝統。

浄瑠璃・歌舞伎	森修先生、阪口弘之先生（ともに市大） 土田衛氏（大阪女子大）
能	伊藤正義先生（市大） 堀口康生氏（大阪女子大）

の学の伝統を継承する。文学史的環境から学芸を考える視点。さらにここに講談の研究が加わることになった。

新大学で喧伝される「総合知」を下支えする文献基礎学（＝古典知とよんでもよいかもしれない）の重要性を再認識させるためにも、これらの蔵書を改めて、学内、学外に知らせる必要がある。

特に、原典（原本）を所蔵することの強みを活かすことが重要。

◎象徴的に証明するものとしての漱石の自筆原稿
↓ 江戸と明治は地続きである
↓ 古典と現代も

『漱石自筆原稿　猫の墓』